会報
札響くらぶ
2019年 9月 第87号
編集・発行／札響くらぶ 〒064-0931 札幌市中央区中島公園 1-15 札響事務局気付
ホームページ http://sakkyoclub.net/sakkyoclub/

第26回札響くらぶサロン

ホルンの新しい世界に引きずり込まれて

8月18日(日)、第26回の札響くらぶサロンが豊平館・広間で開催されました。心配された台風も前日に通過し、爽やかなお盆明けの日曜日でした。

ピッタリ息の合った杉﨑瞳さんと永沼絵里香さん

今回も3つのプログラムで構成され、第一部は10月から3月までの札響定期演奏会の聴きどころを札響くらぶ顧問であり作曲家の八木幸三さんからお話ししていただきました。首席指揮者のバーメルト氏からの「お題」にそれぞれの指揮者が応える形でプログラムが構成されていますが、そのなかの編曲楽曲について原曲から編曲に至ったエピソードや編曲者の思いについて解説され、それぞれの指揮者が札響サウンドをどのように活かして「回答」されるのか、今からわくわくしています。

第二部のミニコンサートは、札響ホルン副首席奏者の杉﨑瞳さんとピアニストの永沼絵里香さんをお迎えしての演奏会です。杉﨑さんは昨年8月に入団し、直後に首席奏者の山田さんが留学され、その後副首席として重責を担って、挑戦されている姿に注目が集まっています。その杉﨑さんの演奏を目の前で聴くことが出来るこの機会を楽しみました。

登場するや否や伴奏なしで吹き始め、ピアノが合流し風変わりなジャズ?が会場を包み込み、その選曲と豪快さに唖然。

乾杯のご発声は竹津香苗さん

杉﨑さんの解説で曲名は「Song of a New World」、PMFでおなじみの世界的女流ホルン奏者のサラ・ウィリスさん(ベルリン・フィル)のためにR.Bissillが作曲されたとお話しされると会場の皆さんも納得！まずは一撃をくらった感じで始まりました。続く2曲も初めて耳にする楽曲で、「HUNTER'S MOON (G.Vinter)」と「THE GLASS BEAD GAME (J.A.Beckel Jr)」が演奏されましたが、フレッシュな作品で技巧を駆使したホルンのかっこいい秀作、杉﨑さんの見事なテクニックと柔らかく奥深い音色が会場にあふれ、ホルンの新しい世界に引きずり込まれました。ピアノの永沼さんの伴奏も曲想に寄り添い、ダイナミックで息の合った見事なサポートでした。

アンコールに応えて「花は咲く」が演奏され、交流パーティー(第三部)に移りました。若いお二人と応援に駆けつけてくださった札響の皆さんを囲み、古(いにしえ)の広間で上等なワインを片手に至福のひと時、杉﨑さんもチャーミングな側面を見せてくれました。

ところで、札響くらぶサロンは第15回から会場を豊平館に移して開催していますが、豊平館のピアノにヴィルヘルム・ケンプのサインが有ることを知りました。豊平館は開拓使によってホテルとして建設されましたが、しだいに公民館の役割を担うようになり、市民会館の建設によって中島公園に移設されました。このサインは札幌の音楽文化がここから始まったことを物語っていると思います。そして今世界に誇るKitaraと札響を見守るように建っています。札響の演奏家を豊平館に招いて行われるこの札響くらぶサロンはなんと素敵なことか。次回、ヴァイオリンの赤間さゆらさんの演奏会も楽しみです。

会員／高木誠一

杉﨑さんへの応援と演奏会のお知らせに（左から八木幸三さん、青木晃一さん、冨田麻衣子さん、白子正樹さん）

9月～12月 定期演奏会

演奏会を楽しく聴くために

八木幸三（札響くらぶ顧問）

第622回定期演奏会
9月20日（金）19：00
9月21日（土）14：00
指揮とオーボエ　ハインツ・ホリガー
ヴァイオリン　ヴェロニカ・エーベルレ
合唱　札響合唱団

ハインツ・ホリガー　©D.Vass

生涯にわたってバッハの創作活動の中心であったカンタータは、およそ三百曲ほど書かれたと言われているが、現存するのはその中の二百曲あまり。彼のカンタータはドイツの人々にとっては特別の存在。教会カンタータは、バッハが属していた教会で礼拝の際、司祭が説教をおこなうとき、それを会衆にわかりやすく説明するための役割を果たしている。

カンタータ第12番は、バッハが楽師長昇進後の第2作として1714年4月の復活祭後第3主日に初演された。冒頭に置かれた短調のシンフォニアは、オーボエの独奏が嘆きの旋律を奏し、弦楽器から終始、「ため息」のモチーフが聞こえる。カンタータ第21番もワイマール公宮廷礼拝堂のオルガニストを務めていた同時期の作品で、全11曲からなる大作。この曲のシンフォニアもオーボエと第1ヴァイオリンが主導する嘆きの音楽である。

ヴェロニカ・エーベルレ
©Felix Broede

■J・S・バッハ

カンタータ第12番「泣き、嘆き、憂い、怯え」よりシンフォニア
カンタータ第21番「わが心に憂い多かりき」よりシンフォニア

■ベルク

ヴァイオリン協奏曲「ある天使の思い出に」

ベルクは、ヴァイオリン奏者クラスナーから協奏曲の依頼を受け、作曲への試行錯誤をしていた頃、彼の知人の若い娘が急死した。彼女を可愛がっていたベルクは、彼女へのレクイエムとしてヴァイオリン協奏曲を構想。それは、副題からも知ることができる。普段は作曲に長い時間を費やすベルクだったが、この曲は歌劇「ルル」のオーケストレーションを中断して、わずか2ヶ月で書き上げている。そして、彼の命を奪った病気の兆候が現れたのもこの作品が完成した時だった。調性的な傾向はあるが、完全な12音による最初の協奏曲で、曲は大きく二つの部分で構成され、バッハのカンタータ「おお永遠よ、汝恐ろしき言葉」からの美しいコラールがパラフレーズされている。

■ホリガー

アルドゥル・ノワール（黒い熱）
～ドビュッシー「燃える炭火に照らされた夕べ」による

原曲は1917年に書かれたドビュッシーのピアノ作品。作曲家が寒さの厳しいパリで暖を取るための炭の調達に苦労していた時、便宜を図ってくれた炭屋のために作ったとされている。赤く染まる炭火の温かさが静かに伝わる2分ほどの小品をホリガーが、どう管弦楽化したのか楽しみである。

■シューマン

交響曲第1番「春」

クララと結婚した1840年は「歌の年」と言われ、数多くの歌曲の傑作が生まれたが、その翌年に作曲された交響曲第1番は、シューマンがウィーンで発見したシューベルトの交響曲第7番の影響を強く受けている。作曲者自身が付けた「春」という副題の由来は、楽章ごとに「春の始まり」「春たけなわ」などの標題があったからである。シューマンのオーケストレーションは、楽器の重なりが多く厚すぎると言われるが、この最初の交響曲では、木管楽器の扱いで確かに弦との重なりは多いが、弦楽部と拮抗して効果的な対比を生んでいる。第1楽章や第4楽章の軽快な主題の応答などフレーズにうまく乗せながら旋律を受け渡している。金管楽器でもトロンボーンをうまくとけ込ませているし、第2楽章コーダのファゴットとの静謐な音の積み重ねによる収束は、第3楽章への雄渾な主題への効果的な序奏にも聞こえる。

札響合唱団

マックス・ポンマー
©Yasuo Fujii

第623回定期演奏会
10月18日（金）19：00
10月19日（土）14：00
指揮　マックス・ポンマー
ソプラノ　松井亜希
カウンターテナー　藤木大地
テノール　櫻田亮
バス　加来徹
バス、イエス　三原剛
合唱　札響合唱団

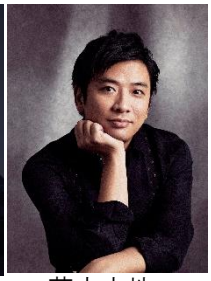
■J・S・バッハ

ヨハネ受難曲

バッハは5曲の受難曲を書いたとされているが、現在残っているのは「ヨハネ受難曲」と「マタイ受難曲」の2作品。「ヨハネ受難曲」は、バッハがライプツィヒ市の聖トーマス教会の聖歌隊長となった聖金曜日にあたる1724年4月に同市のもう一

つの主要教会である聖ニコライ教会で初演された。この曲の特徴は、バッハ自身とされる作詞と台本が、ヨハネ福音書18章、19章の叙述に加えてマタイ受難曲からの2つのエピソードである「ペテロの否認」と「イエスの昇天」の場面で叙事詩的に描かれていることだ。そのために群衆を表す合唱と会衆に問いを投げかけるコラールが重視されている。イエスの磔刑へのドラマがリアルな口調で語られ、第1部冒頭の切迫した合唱や荘厳で全てを浄化させてくれるような最終合唱と全曲を締めくくるコラールの祈りは、まさに天上の調べだ。この曲の神髄をライプツィヒ出身のポンマーが、どう伝えてくれるか期待が膨らむ。

櫻田亮
©Ribaltaluce


藤木大地
©hiromasa

松井亜希

第624回定期演奏会
11月22日（金）19：00
11月23日（土）14：00
指揮　川瀬　賢太郎
フルート　上野　星矢

三原剛

加耒徹

■ムソルグスキー
交響詩「はげ山の一夜」（原典版）

ムソルグスキーが28歳の時に完成させたこの曲は、「禿げ山での聖ヨハネ祭の夜」と題された管弦楽曲で「魔女の集まり、その話し合いとおしゃべり」「サタンの行列」「サタンの異教賛美」「魔女の集い」の4つの部分からなる交響詩のような作品だった。しかし、演奏は拒否され、作曲者は合唱を加えたり、最後の部分を魔物が消えていくように変更したものの、生前に演奏されることはなかった。ムソルグスキーの死後、友人のリムスキー＝コルサコフが、この曲が忘れられることを惜しんで編曲をし、彼自身の指揮で初演した。その編曲版が一般的に人気を得て演奏されてきたが、今から50年ほど前に原典版が出版され、その独創性が魅力となって近年は、原典版が演奏されることも多い。

■ハチャトゥリアン
フルート協奏曲

原曲のヴァイオリン協奏曲は、第2次世界大戦の最中、名ヴァイオリニスト、オイストラフが作曲者の別荘に何度も足を運び、演奏しながら書き進められた。この曲の冒頭を聴くと筆者は、TV特撮映画の「ウルトラQ」のタイトル音楽を想起してしまうのだが、作品全体はアルメニアの民族色を色濃く感じさせる躍動感に溢れたものとなっている。この曲が発表された後、名フルーティスト、ランパルはハチャトゥリアンにフルート協奏曲を依頼した。その時、彼は自身のこのヴァイオリン協奏曲をフルートに置きかえることを提案。オクターブやアルペジオの若干の変更で、新たなフルート協奏曲が生まれた。

川瀬賢太郎

■ムソルグスキー
組曲「展覧会の絵」（ストコフスキー編）

この曲は、作曲者が親友であった画家の遺作展を訪れたときの印象がもとになって生まれた作品で、ピアノ独奏作品として一ヶ月足らずの短期間で1874年に書かれた。ムソルグスキーの生前中は演奏されなかった原曲が、リムスキー・コルサコフにより改訂され、コルサコフの弟子が管弦楽化しているが、原曲から半世紀を経てラヴェルが編曲し、最も良く演奏されるようになった。ストコフスキーは、ラヴェル版がフランス風であったため、よりロシア的な色合いと土俗性を取り戻そうというねらいでこの曲を編曲。ラヴェル版より編成を大きくし、オプション指定でパイプ・オルガンまで加えている。

上野星矢
©Yoshinori Kurosawa

第625回定期演奏会
12月6日（金）19：00
12月7日（土）14：00
指揮　広上　淳一

■マーラー
交響曲第10番（クック版）

作曲家が未完のまま最後に残した作品を他者が補完し、後世に演奏されることは意外に多い。モーツァルトの「レクイエム」、「ブルックナーの交響曲第9番」、プッチーニの歌劇「トゥーランドット」もその部類だ。マーラーの交響曲第10番は、第9番の総譜を仕上げるかたわら着手され、全5楽章は略式総譜として完成し、第1楽章、第2楽章、さらに第3楽章の最初の部分は浄書譜の前段階にあたる総譜草稿にまで到っていた。創作意欲に溢れていたマーラーにとって、51歳の誕生日直前に世を去らなければならなかったことは、痛恨の極みであっただろう。彼の死から半世紀を経過し、デリク・クックは、残された楽譜から音楽全体はすでに完成されたものであり、それを演奏可能にすべきと確信して総譜をまとめ上げ、1964年8月にロンドン交響楽団によって初演された。クックは、いくつかの副声部を書き加えてはいるものの、極めて謙虚に略式総譜をフル・スコアに再現させた。耽美な旋律や独特のオーケストレーションから浮き上がる郷愁に満ちた響きはまさにマーラーそのものだ。

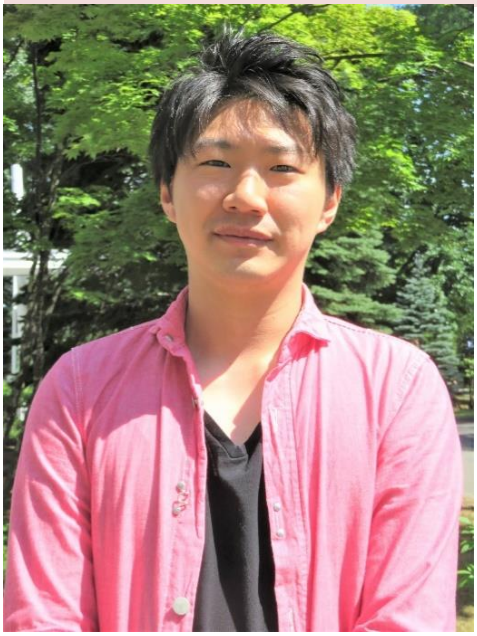
広上淳一　©Masaaki Tomitori

（写真協力　札響交響楽団）

楽員さんに興味津津 ㉒

コントラバス首席奏者 吉田聖也さんに聞く

すべてがつながったオーディション



♪ 漫画家になりたい小学生

生まれは葛飾の堀切、漫画で有名な亀有の近くです。最寄り駅は京成電鉄の「お花茶屋」ですが、当時はまだ下町情緒が残っていて、近所の人はお互いに勝手口から出入りするような所でした。今は閑静な住宅地になってしまいました。

母はピアノの先生で、僕にもピアノをやらせてみたけれど全然好きそうではなかったので、じゃあヴァイオリンにしようということになって、5歳の時に始めて、高校まで教室に通っていました。

小学校のときは絵を描くのが好きで、漫画家になりたいと思っていました。ファンタジーとかゲームも好きだったので、よくストーリーやキャラクターを考えてはニヤニヤしてるという、結構オタクでした。スポーツは一切自分から遠ざけていました。かけっこも絶対ビリッけつだったし、ドッジボールなどの球技も全然使い物にはなりませんでした。

♪ バスギターからコンバスへ

中学・高校は東京タワーの真下にある中高一貫の芝学園に行きました。入学後すぐにコンピュータクラブに入ったのですが、プログラミングが一切できなくてやめてしまいました。その後、中学2年生の時にギター部に入りました。最初はバスギターを担当していたのですが、そのうちに体が大きかったこともあって、コントラバスをやらされました。軽いノリでやってみたら、ヴァイオリンとくらべものにならないくらいの振動が体全体に伝わってくる。ボーンと響くのが楽しくて…。

部活の中には教えてくれる先輩はいませんでしたので、ヴァイオリンで得た技術と知識を生かして、独学でなんとか音を出していました。ちゃんと先生についたのは受験を決めた高校2年生の秋でした。都響の首席の山本修先生でしたが、先生からは礼儀作法から鍛え直されました。気遣いをすることの大切さをたたき込まれました。

5歳の頃

♪ 新しい音楽との出会い

芸大に入学してからは永島義男先生です。大学でのカルチャーショックはいっぱいあります。中高では弦楽器をやっているのは僕一人だったので孤独を感じながら過ごしていました。そもそも弦楽器はヴァイオリンとコンバスしか知らないし、管楽器も知らない。それが大学ではみんなプロを目指していて、コンクールやオケの経験もある。弦楽合奏でピアニッシモをトゥッティで弾いた時は、今までに経験したことのない響きに感動しました。

僕にとって大きな分岐点になったのは、大学2年生の時にエレキベースを始めたことです。芸大にはビッグバンドがあったので、コンバスももちろんやりながら、エレキベースも始めたんです。それから先輩とグループを組んでライブ活動なども行うようになっていきました。

大学4年生の頃にはエレキベースとコントラバスの二刀流を活かしてミュージカルをやるようになりました。劇団四季や東宝ミュージカルでよく演奏していました。ミュージカルを始めると1～2ヶ月を取られるので、なかなかオケの仕事が受けられないんです。でも、ミュージカルは同じ曲を同じメンバーで何か月も本番を踏んで、タイミングとか音色をすごく研究できて、オケにはない経験をしました。

僕はクラシックにもジャズにも偏見はありません。どちらも好きでやっていて、共通点も分かるし、違いもよく分かる。クラシックの人間だからジャズはもともと客観的に見ているのですが、逆にクラシック音楽を客観視できたことは、今もとても役に立っています。

このようにいろいろなジャンルの演奏もしていましたが、自分の軸はやっぱり山本先生であり、永島先生であり、自分の楽器の鳴らし方はそこが原点になっています。

小学校時代は漫画家志望
これはポケモンの漫画

プロフィール

1986年東京都出身。東京芸術大学器楽科卒業。これまでにコントラバスを永島義男、山本修の両氏に師事。劇団四季、宝塚歌劇などのミュージカルで演奏。クラシックの他様々なジャンルにわたる活動を行っており、エレクトリックベースも演奏する。ヴァイオリンとのデュオ“GALI×BULI”（ガリブリ）、コントラバスクインテット“BLACK BASS QUINTET”のメンバー。北海道教育大学岩見沢校非常勤講師。2017年5月札響に入団。

♪ オケはみんなで作るもの

オケのオーディションはいくつか受けていたのですが、札響から突然電話がかかってきて、ゲストトップ（首席客演奏者）をやってくれないかと言われました。札響は初めてでしたが温かい楽団で、自由にさせてくれて、アットホームな感じだったので、このオケに入りたいなあと思いました。

いろんな音楽活動をやっていたので、周りからは「何がやりたいの？」とか、「クラシックじゃないのをやってるとテクニックが荒れるよ」とかいろいろ言われました。でも、自分のやってきたことが全部つながったのが札響のオーディションに受かった時でした。尊敬する楽員の皆さんに、自分が演奏活動を通して育ててきたものを認めてもらえたことが一番うれしかった。自分がやってきたことは間違っていなかったと思えた瞬間でした。3年前、30歳になる年です。

受かったときはホッとしましたが、首席をやらなければいけないと思ったときはぞっとしました。そんな時、永島先生が「オーケストラは一人で頑張るものじゃなくてみんなで作るものだから」と言ってくださったので、その言葉にとても救われたのを覚えています。

コントラバスの悲惨な姿

♪ フレンチボウとジャーマンボウ

弓の持ち方は二つあります。ヴァイオリンのように上から持つフレンチボウと、下から持つジャーマンボウ。世界的にはフレンチの方が多いかな。日本ではジャーマンが主流です。音に違いがあるわけじゃなくて、どういう先生についたかだけじゃないかと思います。

弓を入れるポケットは、付けたい人はひもでくくって付けています。ピチカートを多用するときに弓をそこに入れると楽なんです。ピチカートにもジャズとクラシックの2種類があって、弦をはじく方向が違います。クラシックは少し前に送り出す感じではじきますが、ジャズは打ち付けるようにはじいて、直線的でスピード感がある。オーケストラの中でもジャンルやサウンドに合わせて使い分けるべきだと思います。

コントラバスは楽器によって、縦も横も大きさが違います。厚みも違います。ヴァイオリンからチェロまではある程度規格が決まっていますが、コントラバスは決まっていない。大きさによって音色が違っていて、小さいのは、立つ音で明るい音。大きいのは、どしっとした音ですが、暗くてこもりやすい。

4弦のものと5弦のものとでは音色が違います。ボディの大きさもありますが、弦が1本増えることによって数十キロくらいの力がかかって、圧力、重さ、張力が違うので響き方が変わってきます。3弦のものも使われていましたが、それが4弦に定着して、その後5弦が登場して100年くらいたつのかな。やっぱり弦が少ない方が楽器は良く鳴ります。奏者、作曲家の要望が強まって、どんどん音域が広がってきているのかと思います。

フリーランス時代のライブ活動　GALI×BULI

♪ 楽器が壊れた

失敗談はいくつもあります。最初の頃は、音は大きい方がいいに決まってると、フォルテが3つ書いてあると自分が持ってる力を最大限に出すべきだと思っていました。音色というものがあるし、そのパートの中で音が溶けないといけなかったのに。体の使い方もへたくそで、振りかぶって弾けば鳴るものだと思っていたんですが、逆に体幹の方が大事で、ぶれない動きの方が大きい音が出るんだとわかってきました。

楽器をぶっ壊したことがあります。エレキベースとコンバスをものすごいスピードで持ち替えなくてはいけない演奏があって、コンバスを椅子に立てかけた際、慌てていたので少し不安定でした。指揮者が構わず棒を振り下ろしたので急いでエレキを弾き始めたのですが、その音の振動でコントラバスが椅子から落ち、その衝撃でボキッと折れました。もっと奏者の様子を見てから振り下ろしてほしいとお願いしました。自分や音楽よりも楽器を大事にしておけばよかったなあと思いました。音は変わっちゃいましたけど、接着剤できれいに直って、今はサブ楽器になっています。

ライブ活動その2　BLACK BASS QUINTET

♪ ゲーマーから釣り人へ

チェロの小野木君とは芸大の同期で、札響の旅公演の後などには一緒に渓流釣りに行ったりします。彼が一から教えてくれて、ヤマベやニジマス、この前はイワナも結構いいのが釣れました。釣ったら逃がします。持ち帰って食べようとは思わないし、環境にもいいのでそうしています。

僕はずっとインドアのゲーマーだったので、まさか北海道でこんな喜びを知るとは思ってもいませんでした。本当に札幌に来てよかったなあ。ラーメンも大好きです。

今後は、コンバスの魅力を札幌の人、北海道の人に伝えていきたいと思っています。いいメロディーの曲もありますし、音域の広さやジャンルの多様さとか可能性がすごく多い楽器なので、それを知ってもらえる活動をしていけたらと思っています。

担当／中居・村山・塚田

ＰＭＦホストシティ・オーケストラ演奏会
バボラーク指揮　「謝肉祭」とブル６

今年も夏の訪れと共にＰＭＦの季節がやって来た。昨年はバーンスタイン生誕１００年、今年は開催30回目とメモリアルイヤーが続き、今年のホストシティ・オーケストラ演奏会は我らが札響とＰＭＦ教授陣の出演で、珠玉の演奏が楽しめるプログラム。

指揮のバボラークさんは元ベルリン・フィル首席ホルン奏者で先日の芸術の森野外音楽堂で行われたオープニングコンサートでは現ベルリン・フィルホルン奏者のサラ・ウィリスさんと共演。世界のトップホルン奏者二人が並んで演奏する姿を無料で聴けるとは、これだけでもＰＭＦ開催の意義があろうというものである。

オープニングはドヴォルザークの「謝肉祭」。軽快で華やかな幕開けから14型のオケの鳴りもすこぶる良く好調さが伺える。中間部、穏やかに始まる如何にもドヴォルザークらしい優雅で憂いを帯びた旋律を奏でる札響の弦の美しさがひときわ際立ち、冒頭との対比がより鮮明であった。その後、宮城さんのコールアングレの反復に乗り聖純さんのフルート、関女史のオーボエから田島コンマスのヴァイオリンソロまでの一連の流れの美しさは相変わらず絶品であった。

メインはブルックナーの６番

エリシュカ先生に鍛え抜かれ、もはや十八番とも言える札響のドヴォルザークにバボラークさんの母国でもあるチェコのエッセンスが見事にブレンドされ昇華した実に味わい深い素晴しい演奏であった。

メインのブルックナー６番の演奏前、オケと一緒にバボラークさんも入場。チューニングの音を指揮台の前で静かに聴いている姿は驚きと同時にこの曲に対する意気込みが伺えた。

５番と７番に挟まれ、演奏される機会も少ないマイナーなこの曲を敢えてプログラミングしてくるバボラークさんの意図は演奏が進むに連れ、オケの発する熱量と共に氷解して行く。オケ全体を隈なく見渡し、全体のバランス、特に弦と金管のバランスと曲の構成に重点を置いたと思われる指揮で札響をドライブして行く。荘厳な第１楽章から第２楽章アダージョでのオーボエの「嘆き」から始まり、ヴァイオリンとチェロの第２主題から葬送へと続く弦の響きは当日の白眉でもあり、終結部の超ピアニッシモまで札響の真骨頂とも言える渾身の演奏だった。

吹き振りのバボラークさん

特筆すべきはバボラークさんの指示でいつもとは違う右奥に配置されたホルンセクション。取り分けこのブルックナー６番だけに満を持して登場し、２番ホルンの位置に着席した杉崎さん（８月の札響くらぶサロンにご出演）。曲中何度も現れる短いパッセージのソロパートを完璧に吹き切った堂々たる演奏。指揮がホルンの名手という事もあり相当なプレッシャーだった事であろう。当日のＭＶＰの１人として賞賛したい。

最後まで途切れる事が無かったオケの集中力はもちろん、当日はオケ同様客席の集中力も素晴らしいモノだった。バボラークさんが「ピシッ」と音を立てて指揮棒を指揮台に置くまでホールに満ちた余韻は続き、その後の喝采。オケと指揮者、聴衆が一体となった瞬間だった。

札響がホストシティ・オーケストラとしての重責を十分に果たし、存在意義を世界にアピールし、これからのＰＭＦとの共存にまた１歩前進出来れば何よりではなかろうか。しかしながらこの時期札響は地方公演月間の真只中。惜しむらくは何分にもタイトなスケジュールの為、リハの時間が十分では無かった事であろう。バボラークさんには是非とも、定期演奏会か名曲シリーズでの再演を望みたい。

会員／吉川宗男

（写真提供　ＰＭＦ組織委員会）

札響ポップスコンサート
「スタートレック・メドレー」を聴いて

私はスタートレック全シリーズ全話に加え、劇場映画も全て字幕無しで観てきた。

本場アメリカのトレッキーが集まるサイトでのエンタープライズ号のワープナセルの構造原理に関して誰も答えられない質問に独自の学説を交えてひと講釈垂れるほどのトレッキーである。ラスベガス・ヒルトンのStar Trek Experienceで「タイムトラベル」してコンスティテューション級航宙艦に「搭乗」、ブリッジに立ったこともある。「連邦」のバッジも数種類持っている。

そんな私が数年前から札響のスタートレックメドレーを聴きたいと妄想するようになったのは必然であった。7月17日の札響ポップスコンサートのチラシにその文字を見つけたときの興奮といったら！　ついに札響のスタートレックを聴ける！

ほんの短い、一瞬の演奏である。コンサート全体では序盤のプロローグ的な扱いにすぎない。聴衆や楽員の中にこのメドレーに特別な思い入れのある方が果たして何人いただろうか。

札響ポップスコンサート

しかし私にとってそれは数十年来の至高のクライマックスであり、どんな大作曲家の珠玉作品にも勝る価値を持つ、夢のような瞬間だった。

指揮の藤野浩一さんは完璧なまでに私のようなトレッキーの気持ちを深く理解しておられることがヒシヒシと伝わってくる。その素晴らしい演奏の数分間ばかりはKitara全体がNCC-1701-Aの第一船体と化し、ステージはブリッジそのものに見えた。藤野浩一さんが艦長に見え、札響楽員はクルーだった。意識が宇宙の彼方へ飛んだ。気がつくと涙でステージが霞んでいた。

会員／佐藤秀一

（写真提供　札幌交響楽団）

Ｋｉｔａｒａのバースディ
パイプオルガンとの演奏を終えて

７月６日に行われるオルガンのリサイタルに打楽器で参加して貰えないか、とお話を頂いたのは４月の始め頃でした。ティエリー・エスケシュさんが自作の打楽器とのデュオ曲「グラウンドⅡ」他をやりたいということで、面白そう！とお引き受けさせて頂いたのですが…　段々とお話を進めていくうちに、舞台上にポツンと配置されるという打楽器とオルガンとの距離、そしてリハーサルが１日しか出来ないということで本当に出来るのだろうか、上手くいくだろうか、と不安な気持ちが募っていきました。

リハーサル日、温和で気さくそうなエスケシュさんとお会いし先ずは一安心。とにかくやってみよう！ということで舞台に立ちオルガンの方を見上げると、見えるのは彼の後ろ姿のみ。音を出してみると、最初はオルガンの響きの具合に慣れず、アイコンタクトも取れない為にどうなっているのか分からなくもなりましたが、作曲者本人のアドヴァイスや背中からの懸命の信号を感じながらやっていくと形も見えてきて、段々と楽しさを感じられるようになりました。距離による音の時差も録音を聴く限りは気にならないことも安心材料となり、結果的には自分が気にしていたことが解消され、音楽に集中出来たことが何よりだったと感じています。

舞台には一人　オルガンと離れて

ボレロを終えて

また、もう一曲ご一緒させて頂いたコシュロー作曲のボレロという曲では、オルガンそのもののパワーに圧倒されました。オルガンのすぐ前でラヴェルのボレロの様に小太鼓を叩き続けていたのですが、音圧、音量ともに敵わないと感じる瞬間もあり、キタラのオルガンの底力、そしてエスケシュさんの操る巧みさを体感しました。

最後に、エスケシュさんの真骨頂である即興演奏を袖で聴くことが出来、一緒に演奏させて頂いたことはもちろん、「一聴衆」としてもとても刺激に溢れるコンサートでした。この様な機会を頂けたことに感謝申し上げます。ありがとうございました。

札響ティンパニ・打楽器首席奏者　入川　奨

（写真提供　札幌コンサートホール）

札響桂冠指揮者
岩城宏之氏が書き残した話

明治は遠くなりにけり。「明治」どころではない。我々中高年者にとっては、今や「昭和」も遠くなりつつある。

そして、わが札響にも記憶が遠くなりつつある人がいる。札響桂冠指揮者岩城宏之氏である。岩城氏は１９７５年～８８年にかけて札響の正指揮者、音楽監督を務め、退任後はすぐに桂冠指揮者に就任している。今年の６月13日で没後13年を迎えたところである。

岩城氏の音楽監督時代に札響は技術的にも名声の上でも飛躍的に発展を遂げた、と感じている人は多いはずである。岩城氏の札響への多大なる功績は言うまでもないことであるが、一方で岩城氏は札響との間で、いくつもの楽しいエピソードを残している。日本を代表する指揮者である岩城氏は、同時にすぐれた文筆家、エッセイストでもあった。著書は優に数十点を越えていると思われるが、そのところどころに札響（札幌）での面白い話が顔を見せるのである。その一端を紹介しようというのがこの拙文の意図である。

札響桂冠指揮者　岩城宏之氏

まず、１９８２年９月６日のこと。この日は岩城氏五十歳の誕生日で、札響の定期演奏会の日でもあった。「五十にならなければならないという秒読みに入ってからは、鬱の、長い長いクレッシェンドが続いた。」、「ぼくは自分の誕生日を他人に教えるような愚はやらない。あれは催促がましくてみっともない。」という岩城氏であるから、楽員にこの日が自分の誕生日であることを伝えるはずはない。ところが、アンコールが終わって再びステージに足を踏み出した時、「ハッピー・バースデー・トゥ・ユー」が鳴り出したのである。岩城氏曰く「オーケストラとお客さんの温かい拍手で、テレにテレた。だが本当をいうと、嬉しくてちょっぴり涙が出た。」と。なんと素直で、正直な反応と告白ではないか。

もう一つ。１９８３年の「グリーンコンサート」のこと。この年の会場は知事公館の庭だったらしい。演奏が終ってアンコールの前に、岩城氏はステージの近くで聴いていた横路新知事をステージにひっぱり上げた。モーレツにいやがる横路知事に半ば強引にマイクを向けて、「知事というのは初体験でしょう。では別の初体験もしていただきましょう。」と言って、横路知事を今度は指揮台に押し上げた。岩城氏の合図でラデツキーマーチが始まり、そのまま横路知事は指揮棒を振り続けて、演奏は無事終わったそうである。

これだけでも十分にほほえましい光景で、喜ぶ観客の姿も目に浮かぶのであるが、横路知事の指揮棒は二拍子のマーチなのに最後まで三拍子のように動いていたという。一層ほほえましく感じるのである。

このエッセイの中で岩城氏は「北海道の人たちはとても大らかだ。というより、こういうこと（公式の迎賓館のような場所で野外音楽会を開くこと）にとても熱心である。」とも、「ぼくは、北海道は日本から独立すべきだと思うほど、ここの人たちが好きである。」とも言っている。うれしい限りである。

振り返ってみると、私は岩城宏之＝札響の演奏を二度（第２８４回、第４８０回定期）しか聴いていないような気がする。札幌在住でなかった時期もあるが、もっと聴いておけばよかったとの思いは強い。結果的には指揮者岩城宏之のファンではなく、エッセイスト岩城宏之のファンであったことになる。今となってはこれで良しとするほかはない。

会員／村山英朗

（写真提供　札幌交響楽団）

随想　本棚の隅から　24

札響のマチネーが始まった２００５年は、４月が尾高音楽監督のラフマニノフとチャイコフスキー、５月は高関正指揮者のハイドンとマーラー、そして、６月が岩城宏之さんの登場と、魅力いっぱいの定期が続いた。

札響第４８０回定期演奏会
２００５年６月18日
プログラム
指揮：岩城宏之
ヴァイオリン：川久保賜紀
ショスタコーヴィッチ
ヴァイオリン協奏曲第１番
イ短調作品77
ストラヴィンスキー
バレエ音楽「火の鳥」

川久保賜紀さんのヴァイオリンはさすがに美しく、それとチェレスタが印象的だった。

これが、岩城さんが札響を指揮した最後の演奏会になった。翌年の６月13日にお亡くなりになった。あの日、岩城さんの指揮をしている後姿はしっかりしていたけれど、歩く姿にしみじみ月日の経過を実感した。私が岩城さんの指揮を初めて聴いたのは１９７３年８月、Ｎ響の札幌公演だった。

ドヴォルザークの「新世界」とベートーベンの「英雄」だった。以来オーケストラには見る楽しみがあると気が付いて、せっせとコンサートに足を運ぶようになった。音楽ばかりでなく、岩城さんはエッセイをたくさん残して居る。中でも私が好きなのは、「要するに『好き』か『嫌い』かの問題であって『わかる』とか『わからない』なんていう言い方の介入する余地のない世界が、音楽なのではないだろうか。」ということばである。何もわからない私が音楽を聴いていてもいいのだと安心した。

また「オーケストラの響きはお金の音だと言いたいのだ。オーケストラというものは猛烈に金を食う非生産的なもので、存在自体がもともと赤字なのである。人類が生き続けていくために必要不可欠なものではないし、無駄だと言われればそれまでだ。オーケストラだけでなく、あらゆる芸術活動がそうで、こういう無駄を大事にするのが動物と人間の違いだと思って仕事を続けている。」とも言っている。

たとえ、ささやかでも札響くらぶのボランティア活動をしているのは私が人間である証なのだと言いたい。

さらに岩城さんは「世界中、一流のオーケストラがあるところには、かならず素晴らしいホールがある。ホールが良いオーケストラをつくる」と述べている。

札響は世界で一流のオーケストラになるに違いない。キタラをメインホールにしているのだから…。

会員／井上明子

待望の「高崎芸術劇場」オープン

先日送られてきた「群響ファンズ」の会報「翔け群響　93号」に次のような記述を見つけた。

「来る９／20に待望の新本拠地ホール『高崎芸術劇場』が開館致しますが…」

早速「高崎芸術劇場」で検索。そこには「同劇場は多様なジャンルの音楽や舞台芸術に対応できるメインホール（２０３０席）、室内楽などに適した音楽専用の小ホール（４１５席）、スタンディングライブから演劇、舞踊、能にまで対応する可変型ホールのスタジオシアター（５６８席、スタンディング時は１０９８人収容）の３つの主要ホールで構成されている。舞台芸術の『鑑賞・創造・発信』が一体化した複合的な劇場である」と紹介されている。

もちろん、この劇場は群馬交響楽団の本拠地となり、９月20日のこけら落としには大友直人氏の指揮で群響と高崎第九合唱団による「第九」が演奏される。観覧希望者が多くて同日は二回公演にしたそうである。

ＪＯＦＣ（日本プロオーケストラファンクラブ協議会）の総会が高崎で開催されるのは何年後だっただろうか。その時には是非とも参加しなければと今から思っているところである。

会員／村山英朗

スタッフの活動報告

６月１０日（月）
会報「札響くらぶ」８６号発行
６月２２日（土）
札幌市内中学校吹奏楽部招待事業
稲穂中　４２名
栄南中　２８名
北都中　３３名
栄中　　４４名
６月２４日（月）
６月期運営会議
８月１８日（日）
第２６回「札響くらぶ」サロン

ご意見・ご感想をお寄せください

札響演奏会の感想、クラシック音楽に関すること、この会報に関するご意見・ご要望など、会員の皆様からの投稿（800字～1000字）をお待ちしています。

投稿はハガキ、封書またはＥメールで、住所、氏名、会員番号と電話番号等の連絡先をお書きの上、「札響くらぶ事務局」宛にお送りください。

宛　　先：　〒064-0931　札幌市中央区中島公園1-15　札響事務局気付
Ｅメール：　kaiho@sakkyoclub.net（会報専用メールアドレス）

スタッフの声

▼札響くらぶサロンのミニコサートが、新しい楽団員の活躍の場となってきていて、大変嬉しく思います。音楽家を目指している息子と年令も近く、ミニコンサートの打ち合わせをしている時も羨ましく逞しく思う事も多いです。音楽と人となりが共に素晴らしい！　（上野）

▼６月に金沢に行ってきました。東海地方は梅雨入りしていましたが、金沢はまだ。おかげで岡崎で買った傘も使わずに済みました。オーケストラ・アンサンブル金沢のホームグランド、石川県立音楽堂は「金沢駅もてなしドーム」のすぐ隣。抜群の立地ですね。今回は仕事の関係で聴けませんでしたが…。　（有田）

▼札幌市民交流プラザができて間もなく1年。プラザの中にあるＳＣＡＲＴＳコートで、札響くらぶサロンを開催することができました。ミニコンサートはモーツアルトの「弦楽三重奏のためのディヴェルティメントＫ５６３」、まさかの６楽章全曲演奏でした。大平さん、小野木さん、鈴木さん、ありがとう！　（西川）